

Consciousness and the Present Conditions of University Students-Results of Questionnaires on School Uniforms and Plain Clothes-

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2008-01-10 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 服部, 由美子, 松村, 美帆子, 田上, 秀一, 森, 透, HATTORI, Yumiko, MATSUMURA, Mihoko, TANOUE, Shuichi, MORI, Toru メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10098/1436

大学生の服装に関する意識と現状

－学校制服と私服についての調査から－

服部由美子・松村美帆子・田上秀一*・森 透
(福井大学教育地域科学部, *福井大学大学院工学研究科)

(2007年 8月31日受付)

Consciousness and the Present Conditions of University Students
－Results of Questionnaires on School Uniforms and Plain Clothes－

Yumiko Hattori, Mihoko Matsumura, Shuichi Tanoue* and Toru Mori
Faculty of Education and Regional Studies, University of Fukui
*Graduate School of Engineering, University of Fukui

緒 言

現代社会において、衣服は生活する上で不可欠なものであり、TPO (Time・Place・Occasion) に応じた「装い」をすることが求められている。また、ノン・バーバル・コミュニケーション (言語以外による伝達) のツールとして、衣服には自分のことを相手に伝える力を備えている¹⁾。

日本では、中学校・高校における通学服は所属を表す、帰属意識を高める、生徒を管理するなどの目的から規定の服装すなわち制服の着用を義務づけている学校が多い。これに対して、大学では服装を規定しないで私服を着用するが多い。このような制服から私服への変化は、日々の生活へ及ぼす影響は大きく、大学生は服装の規制から開放され、好きな衣服を着られる楽しさ、気候や気温の変化に容易に対応できる快適さなど、ファッションに対する興味関心の高まる一方で、手持ちの衣服を選択し、着装することに戸惑いを感じることも少なくないと思われる。

従来、服装に関する研究は多方面から数多く行なわれているが、制服に関する研究^{2) -5)} は高校生を対象にした報告が多く、制服から私服への転換期に焦点をあてた研究は少ない。

本研究では、学校の制服と私服の現状を把握するために、大学生を対象にアンケート調査を行い、服装に関する意識と着装行動について明らかにした。

研究方法

1. 調査対象者

調査対象者は本学学生330名で、その内訳は平成18年4月に入学した1年生223名(男子99名、女子124名)および3・4年生107名(男子39名、女子68名)である。

2. 調査項目

アンケートは、大学入学前に関する項目と大学入学後に関する項目に大別した。大学入学前に関する項目では、高校の制服(夏服と冬服)についてそれぞれ「着心地」「動き易さ」「デザイン」「サイズ」「満足感」の5項目について、5段階評価により回答を求めた。また、通学および学校行事(クラブ活動、ボランティアを含む)以外における制服の着用について尋ねた。

入学後に関する項目では、「ファッションに対する興味関心」「服装に関する情報源」について回答を求めた。なお、3・4年生は制服に対する記憶の限界を超えていることを考慮し、入学後に関する項目のみ調査を行った。

また、アンケートの最後には自由記述欄を設け、「大学入学後、制服から私服になった感想」を尋ねた。

3. 調査方法および時期

調査は集合調査法により、授業前あるいは授業後に担当教員が質問用紙を配布し、その場で記入回収した。また、直接アンケート用紙を配布した場合には、1週間以内に回収した。

1年生については制服に対する記憶がまだ新しいと思われる平成18年6月～7月、3・4年生については平成18年11月に行った。

1. 制服に対する意識と着装行動

(1) 高校の制服に対する評価

大学1年生における高校の制服の有無と上着のデザインを表1に示す。学生の多くは高校生の時に制服を着用しており、大学入学後から私服で学生生活を送っている。高校の制服は、男子では詰襟型が多く78.8%を占め、ブレザー型は18.2%である。これに対して、女子ではブレザー型が多く60.5%を占め、セーラー型は37.1%である。

高校の制服に対して、「着心地は良かったですか」「動き易かったですか」「デザインは好きでしたか」「サイズは身体にフィットしていましたか」「制服に満足していましたか」の質問に対する評価を、夏服について図1に、冬服についてデザイン別に図2に示す。無回答を除いた回答率(%)で示している。

表1 高校の制服の有無とデザイン

対象	あり			合計	なし
	詰襟型・セーラー型	ブレザー型	その他		
男子	78 (78.8)	18 (18.2)	1 (1.0)	97 (98.0)	2 (2.0)
女子	46 (37.1)	75 (60.5)	2 (1.6)	123 (99.2)	1 (0.8)

() 内の数字は、%を示す。

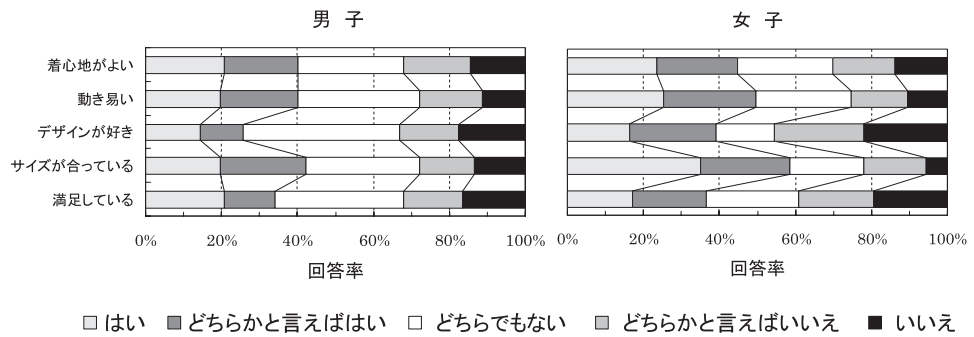


図1 夏服の評価

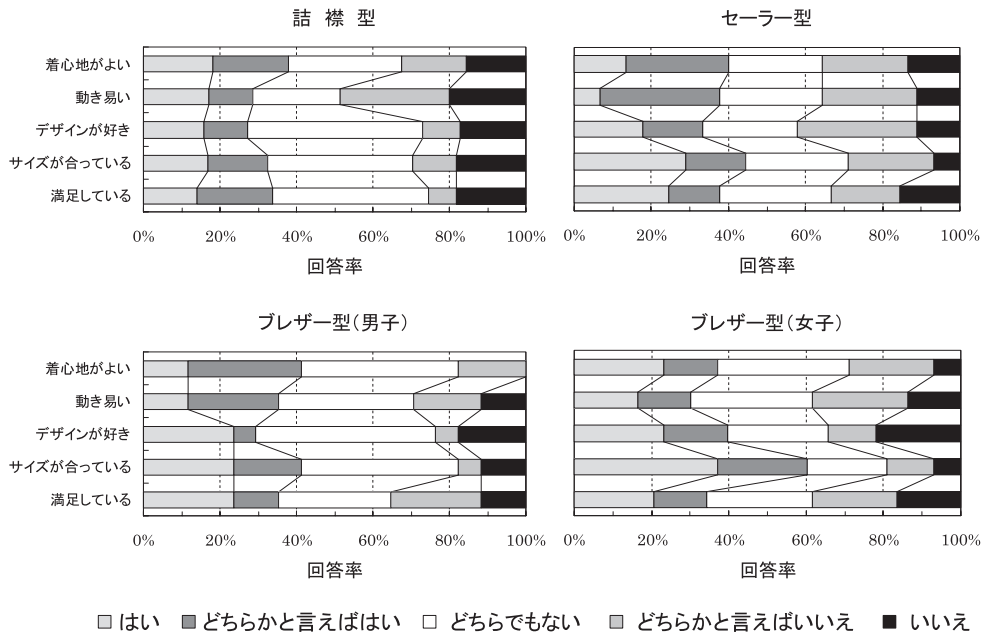


図2 冬服の評価

夏服では、男子は「着心地」「動き易さ」「サイズ」について「どちらでもない」の回答が多く、「はい」と「どちらかと言えばはい」を合わせた肯定的な回答が「どちらかと言えばいいえ」と「いいえ」を合わせた否定的な回答よりも多い。「デザイン」については他の項目と比較して肯定的な回答は少ない。これに対して、女子は「着心地」「動き易さ」「サイズ」について男子よりも肯定的な回答が多い。「サイズ」における肯定的な回答は約60%に対して、「デザイン」については半数近く否定的な回答である。男女とも「デザイン」を除いて良好な評価が得られているにもかかわらず、「満足感」の評価は分かれている。

冬服では、「デザイン」により評価の異なる傾向が認められる。特に、男子の詰襟型では「着心地」「デザイン」「サイズ」については夏服同様「どちらでもない」の回答が多く、評価は分かれる傾向を示している。また、「動き易さ」については否定的な回答が半数近くを占めているにもかかわらず、「満足感」については否定的な回答が少ない。女子では、セーラー型ブレザー型ともに「サイズ」については他の項目と比較して肯定的な回答が多い。しかし、セーラー型の「デザイン」については否定的な回答が多い。ブレザー型は、男女ともに「着心地」「動き易さ」「デザイン」「サイズ」について良好な評価が得られているが、「満足感」の評価は分かれる傾向を示している。

以上のように、制服の評価には個人差がみられ、「着心地」「サイズ」「満足感」については男女ともに概ね良好な評価が得られている。しかし、男子の詰襟型では動きにくいにもかかわらず支持される傾向を示しているように、制服は一般の衣服とは異なった性格を有することを示唆している。制服のモデルチェンジ、廃止あるいは制服の復活^{6)~8)}など、学校を管理運営していく上で通学服のあり方は生徒にとっても、教師にとっても重要である。機能性だけでなく、社会とのつながりを十分吟味したうえで検討することが望まれる。

(2) 通学および学校行事以外における制服の着用

制服の利用状況を把握するために、学校の通学およびクラブ活動やボランティア活動などを含む学校行事以外で制服を着用している時を、デザイン別に表2に示す。複数回答で求めている。

男子では、「着用しない」が最も多く、次いで「冠婚葬祭」、「塾・習い事に行く時」である。ブレザー型では、「塾・習い事に行く時」「図書館」に制服を着用する一方、「着用しない」も半数近くを占め、評価は分かれている。

女子では、デザインに関係なく「冠婚葬祭」が最も多く、回答率では50%台を示し、次いで「塾・習い事に行く時」である。セーラー型では図2に示しているように、「デザイン」について否定的な回答すなわちデザインを好まないという回答が多いにもかかわらず、「塾・習い事に行く時」「図書館」には2人に1人、「友達と遊ぶ時」には4人に1人の割合で、制服を着用していることになる。また、「着用しない」「その他」を除いたどの項目においても女子の回答率は高く、私生活においてかなり制服を着用して行動し、ファッションの一つとして位置づけていることがうかがえる。

表2 通学および学校行事以外における制服の着用

対 象		塾・習い事	図書館	買い物	友達と遊ぶ時	冠婚葬祭	着用しない	その他
男子	詰襟型	19.2	11.5	7.7	3.8	37.2	37.2	3.8
	ブレザー型	27.8	16.7	0.0	0.0	33.3	44.4	0.0
女子	セーラー型	52.2	43.5	10.9	23.9	50.0	19.6	2.2
	ブレザー型	32.0	21.3	9.3	12.0	54.7	22.7	1.3

2. 大学入学後における服装に関する意識と着装行動

(1) ファッションに対する興味関心と情報源

「入学後、以前よりもファッションに興味を持つようになりましたか」に対する回答を、表3に示す。

「はい」の回答率は、1年生の男子では51.5%に対して、女子では87.1%を示し、女子の方がファッションに対して興味関心のあることを示している。しかし、3・4年生の回答率は男女ともに80%以上を示していることから、男子は学生生活を送る中でファッションに対する興味関心が高まるといえる。

衣服の購入や毎日のコーディネートに参考している情報源を表4に示す。複数回答で求めている。1年生では男子は「ファッション雑誌」がもっとも多く、回答率38.4%を示し、次いで「ディスプレイ」28.3%、「友人」27.3%、「その他」22.2%の順である。女子は、男子と同様「ファッション雑誌」を参考としている場合が最も多く、回答率66.1%である。次いで「ディスプレイ」52.4%、「友人」44.4%の順で、男子より回答率は高い。大学1年生では、衣服の購入や毎日のコーディネートには家族よりも友人の影響が大きい。

3・4年生では、それぞれの選択肢の回答率は増加傾向を示すなかで、男子では「家族」、女子では「家族」と「友人」は減少していることから、服装選びに対して自立していく様

表3 「入学後、以前よりもファッションに興味関心はありますか」に対する回答

対 象		はい	いいえ	無回答
1年生	男子	51.5	47.5	1.0
	女子	87.1	11.3	1.6
3・4年生	男子	87.2	12.8	0.0
	女子	82.3	16.2	1.5

表4 衣服の購入とコーディネートの情報源

対 象		雑誌	新聞	テレビ	インターネット	家族	友人	店員	ディスプレイ	その他
1年生	男子	38.4	1.0	9.1	4.0	9.1	27.3	8.1	28.3	22.2
	女子	66.1	0.0	14.5	0.8	13.7	44.4	15.3	52.4	8.1
3・4年生	男子	46.2	2.6	25.6	5.1	2.6	30.8	23.1	41.0	33.3
	女子	76.5	0.0	23.5	5.9	10.3	33.8	26.5	51.5	7.4

子がうかがえる。また、社会における普及を反映して、男女とも「インターネット」は増加傾向を示していることから、今後の推移が注目される。

「その他」について、男子の回答では「自己流」や「自分の感性」と記入されていたことから、男子は衣服の購入や選択に対して他者の影響を受けにくいことが考えられる。

(2) 服装に関する自由記述の分析

「大学入学後、制服から私服になった感想」について、自由記述欄に書かれた内容を分析して、「私服に対する肯定的な意見」と「私服に対する否定的な意見」に分類し、回答数の多かった記述内容のうち上位5項目について、表5に「私服に対する肯定的な意見」、表6に「私服に対する否定的な意見」を示す。自由記述欄に何らかのコメントを書いた学生は、1年生では男子62名(62.6%)、女子104名(83.9%)、3・4年生では男子31名(79.5%)、女子63名(92.6%)、合計260名である。大学生における服装に対する興味関心の高さを反映している。

私服に対する肯定的な意見の主な内容は、「服装選びが楽しい(嬉しい)」「私服の方が楽で良い」「気候や気温に合わせて調節できる」「個性を表現できる」「大学生だと感じられる」である。1年生では「私服の方が楽で良い」という記述が多く、服装を自由に選択できることを反映している。「服装選びが楽しい(嬉しい)」は、女子が多い。

私服に対する否定的な意見の主な内容は、「毎日の服装選びが大変(面倒)」「服装(外見)を気にするようになった」「お金がかかる」「制服のほうが楽で、良かった」「服装選びに時間がかかる」である。全体を通して「毎日の服装選びが大変(面倒)」が最も多い。3・4年生では、女子は「服装(外見)を気にするようになった」、男女ともに「お金がかかる」「服装選びに時間がかかる」が多い。服装に対する興味関心の高まりと同時に経済的・時間的な負担も大きくなる傾向が認められる。

また、「私服が楽」あるいは「制服が楽」のように相反する記述が上位を占め、「服選びが大変(面倒)」のあとに「楽しい(嬉しい)」(31名)「個性を表現できる」(12名)「気候や気温に合わせて調節できる」(11名)という組み合わせもかなり多くみられ、服装に対する考え方に矛盾と葛藤が生じていることもうかがえる。

以上のように、大学に入学するまで衣服の選択について考える余地の少なかったことも要因の一つとして考えられるが、大学生では制服から私服に替わる影響は大きく、毎日の服装選びに悪戦苦闘しながら洗練されていることが推察される。

学校教育の中では、平成14年4月1日から施行されている中学校学習指導要領⁹⁾に「〔家庭分野〕2内容A生活の自立と衣食住(3)衣服の選択と手入れについて、次の事項を指導する。ア衣服と社会生活とのかかわりを考え、目的に応じた着用や個性を生かす着用を工夫できること。」とあり、小学校家庭科で学習した保健衛生上の着方と生活活動上の着方を踏まえて、衣服の社会生活上の機能を中心に、時・場所・場合に応じた着方ができ、着方によって人に与える印

表5 私服に対する肯定的な意見（上位5項目）

記述内容					(名)
	1年生		3・4年生		合計
	男子	女子	男子	女子	
服装選びが楽しい(嬉しい)	5 (5.1)	21 (16.9)	4 (10.3)	23 (33.8)	53 (16.1)
私服の方が楽で良い	15 (15.2)	14 (11.3)	3 (7.7)	6 (8.8)	38 (11.5)
気候や気温に合わせて調節できる	5 (5.1)	13 (10.5)		6 (8.8)	24 (7.3)
個性を表現できる	5 (5.1)	9 (7.3)	4 (10.3)	5 (7.4)	23 (7.0)
大学生だと感じられる	1 (1.0)	5 (4.0)		4 (5.9)	10 (3.0)

()内の数字は、%を示す。

表6 私服に対する否定的な意見（上位5項目）

記述内容					(名)
	1年生		3・4年生		合計
	男子	女子	男子	女子	
毎日の服装選びが大変(面倒)	31 (31.3)	71 (57.3)	13 (33.3)	34 (50.0)	149 (45.2)
服装(外見)を気にするようになった	1 (1.0)	4 (3.2)	2 (5.1)	21 (30.9)	28 (8.5)
お金がかかる	1 (1.0)	12 (9.7)	6 (15.4)	8 (11.8)	27 (8.2)
制服のほうが楽で、良かった	11 (11.1)	2 (1.6)		6 (8.8)	19 (5.8)
服装選びに時間がかかる		4 (3.2)	3 (7.7)	10 (14.7)	17 (5.2)

()内の数字は、%を示す。

象が異なることや自分らしい着方の工夫ができるようにすること¹⁰⁾などが解説されている。そして、「技術・家庭用教科書」では平成14年度版から着方に関する内容の充実^{11)~14)}もみられる。学習内容が児童生徒の服装に対する意識へ影響を及ぼすことも考えられるため、今後の動向に注目する必要がある。

結 語

学校の制服と私服に関する意識と現状を把握することを目的として、大学生330名を対象に、アンケート調査を行い、以下のような結果が得られた。

(1) 高校の制服に対する評価は、男子の詰襟型では「動き易さ」、女子では「デザイン」に対して否定的な回答が多い。しかし、「着心地」「サイズ」「満足感」に対して概ね良好な評価が得られ、機能性以外の要因も重視する必要性が示唆された。通学および学校行事以外では、「冠婚葬祭」に制服を着用することが多く、それ以外では男子は制服を着用しない傾向を示した。女子は「塾・習い事」「図書館」の他に「友達と遊ぶ時」や「買い物」にも制服を着用して行動し、ファッションの一つとして位置づけられていることがうかがえる。

(2) 大学生のファッションに対する興味関心の度合いは高く、特に男子は学年とともに高くなる傾向を示した。衣服の購入とコーディネートに参考にしている情報源は、男女ともに「ファッ

ション雑誌」と「ディスプレイ」が多く、家族よりも友人からの影響が大きい。「インターネット」の利用動向が注目される。

(3) 自由記述の分析から、私服に対する肯定的な意見として「服装選びが楽しい(嬉しい)」「私服の方が楽で良い」「気候や気温に合わせて調節できる」「個性を表現できる」、否定的な意見として「毎日の服装選びが大変(面倒)」「服装(外見)を気にするようになった」「お金がかかる」「服装選びに時間がかかる」が上位に抽出され、毎日の服装選びに時間的・経済的に負担を感じながらも私服を受入れていることが認められる。

終わりに、アンケート調査にご協力くださいました皆様に感謝いたします。

参考文献

- 1) 有吉直美, 生きる力を育てる「服育」－これまでの活動に見る服育の可能性－, 繊維製品消費科学, 48, 21 (2007)
- 2) 福村愛美, 高校生の制服に対する意識と学校教育との関連性について, 大分県立芸術文化短期大学研究紀要, 第32巻, 123-130 (1994)
- 3) 福村愛美, 高校生の制服に対する意識と学校教育との関連性について (第2報), 大分県立芸術文化短期大学研究紀要, 第34巻, 241-249 (1996)
- 4) 土屋みさと・堀内かおる, 着装行動に対する高校生の意識, 日本家庭科学会誌, 48, 141 (2005)
- 5) 羽賀敏雄・渋谷知佳子, 高校生の制服着用の意識とコミュニケーション行動, 弘前大学教育学部紀要, 第95号, 93-101 (2006)
- 6) 佐野勝彦, スクールウェアの沿革と最近事情, 繊維製品消費科学, 47, 396 (2006)
- 7) 福島慎吾「Q セーラー服の制服はいつ始まったの? A 86年前、福岡の女学校が初めてです。」『朝日新聞』2007年6月3日付朝刊, 10版, 24面
- 8) 「制服」『フリー百科事典 ウィキペディア日本語版』, 2007年8月23日12時
<http://ja.wikipedia.org/wiki/%E5%88%B6%E6%9C%8D>
- 9) 文部科学省, 中学校学習指導要領 (平成10年12月), 国立印刷局, 85 (2007)
- 10) 文部科学省, 中学校学習指導要領 (平成10年12月) 解説—技術・家庭科編一, 東京書籍, 56 (2006)
- 11) 中間美砂子他, 技術・家庭【家庭分野】, 開隆堂, 平成13年2月20日文部省検定済
- 12) 中間美砂子他, 技術・家庭【家庭分野】, 開隆堂, 平成17年1月31日文部省検定済
- 13) 石田晴久他, 新しい技術・家庭 家庭分野, 東京書籍, 平成13年2月20日文部省検定済
- 14) 佐藤文子・渡辺彩子他, 新編 新しい技術・家庭 家庭分野, 東京書籍, 平成17年1月31日文部省検定済